九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「荘子」養生主篇をめぐって

佐藤, 明

https://doi.org/10.15017/2328531

出版情報：哲學年報. 48, pp.65-85, 1989-02-27. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

『荘子』養生主篇をめぐって

佐藤　明

始めに

現存の『荘子』三十三篇のうち、最初の七篇が内篇と呼ばれ、『荘子』の中でもまとまった重要な部分であるとされてきた。内篇七篇とは、逍遙遊・斉物論・養生主・人間世・徳充符・大宗師・応帝王の各篇を指すのであるが、さらにこれらの篇の中でも、逍遙遊・斉物論の二篇が極めて精緻であり、『荘子』の眼目として認められてきた。そこで、内篇のその他の篇について概観してみると、人間世以下の四篇では、大体において説話が中心であり、何らかの関連性のあるものを集成して一篇にしたという感がある。ただし、すべてが説話のみで成り立っているというわけではなく、例えば大宗師篇は論説文で始まっているし、その他にも論説的な文で成り立っている部分もあるが、全体の割合いからすれば説話文が圧倒的に多い。

では、逍遙遊・斉物論二篇と人間世以下四篇の間にある養生主篇はどうであろうか。この篇を見てみると、他の篇とはやや傾向を異にする面があることがわかる。一つには、この篇が内篇の他の篇に比べて極めて短いということであり、二つには、文体の上からは論説文と説話文が混淆して、しかも断片的であり、果たしてこの篇が一貫したものであるかどうか明らかにし難いという点である。そして、この篇を強いて他の篇に結びつけようとしても、冒頭の二篇の精緻さに比べればやや劣るようであるし、後の四篇が説話中心の組み立てであるのに対しては性格を異にするよ

うである。そのような意味もあってか、養生主篇は従来それほど注目されなかった。しかし、養生主篇を構成や文体の上からとらえ、このような形をなすに至った経路を考察することによって、内篇成立の一端を知る手がかりにもなるのではないかと考える。小論では以上の視点から、養生主篇について考察を加えてみたい。

一

まず篇名についてであるが、「養生」については、篇中にもこの語が使われているので、そこから採ったものと思われる。「主」とは、根本・要点という意味で上の語に付けられたのであろう。なお林雲銘は、「養生主者、言養其所籍以生之主人。即斉物論篇所謂真君是也」（『荘子因』）と述べ、「生主を養う」という意味に解しているが、やはり「生を養う主」と見るのが妥当であろう。従ってこの篇名より連想される内容は、「生を養う」（生命を養い保つ）ことに関してであると推察される。

さて、養生主篇の内容を順に見ていくつもりであるが、それに際してこの篇を六つの部分に分けて考察する。六つの部分に分けたのは、この篇の構成を見るに当っては、なるべく細かく分解して考察する方が便利であると考えるからである。なお養生主篇を六つに分ける考え方は、例えば王先謙の『荘子集解』でもとっているが、普通は四ないし五程度に分けて考えることが多いようである。

(一)

まず、第一節の全文を記すと、

「吾生也有涯、而知也無涯。以有涯隨無涯、殆已。已而為知者、殆而已矣。
為善無近名、為悪無近刑、縁督以為経、可以保身、可以全生、可以養親、可以尽年」

となる。この部分の前半は、句末に「涯」が三度繰り返され、「已」が句末、または句末近くで二度現れており韻を踏んだ文であるといえる。また後半についても、「名・刑・経」・「身・親・年」が明らかに韻を踏んでいる。

内容を要約すれば、前半は「人の一生には涯りがあるが、知には涯りがない。涯りある人生で涯りない知を求めることは、あぶないことである」という意味になろうし、後半は「善いことを行っても評判になるようなことはなく、悪いことを行っても刑罰に触れるようなことはない。このように心がけていけば、身を保っていくことができる」ということになろう。この二つの部分は、内容の上でも関係があり連続したものと見なすことができるが、二つに分けて、それぞれを独立したものと見ることも可能である。なお前半部の「殆已。已而為知者、殆而已矣」という表現は、斉者論篇の「因是已。已而不知其然、謂之道」の表現と近いようである。(注1) 内容を思想的に考察することは措くとしても、この部分は一篇の書き出しとしては主張が明確であり文も洗練されており、効果的であることは確かである。

(二)

次に、「解牛」説話が続く。これはよく知られており簡潔な説話であるが、この篇の中では最も長いものである。

「庖丁為文恵君解牛。手之所触、肩之所倚、足之所履、膝之所踦、砉然嚮然、奏刀騞然、莫不中音。合於桑林之舞、乃中経首之会。

文恵君曰、『譆、善哉。技蓋至此乎』庖丁釈刀、対曰、『臣之所好者、道也。進乎技矣。始臣之解牛之時、所見無非牛者。三年之後、未嘗見全牛也。方今之時、臣以神遇而不以目視。官知止而神欲行。依乎天理、批大郤、導大窾、因其固然。技経肯綮之未嘗、而況大軱乎。良庖歳更刀。割也。族庖月更刀。折也。今臣之刀十九年矣。所解数千牛矣。而刀刃若新発於硎。彼節者有間、而刀刃者無厚。以無厚入有間、恢恢乎其於遊刃、必有余地矣。是以十九年而刀刃若新発於硎。雖然、毎至於族、吾見其難為、怵然為戒、視為止、行為遲、動刀甚微。謋然已解、如

土委地。提刀而立、為之四顧、為之躊躇満志。善刀而蔵之』

文恵君曰、『善哉。吾聞庖丁之言、得養生焉』」

これは、文体の上からすれば説話の形式であり、最後の「吾聞庖丁之言、得養生焉」の表現は、この部分の「書き出し」とも対応しており、本来まとまった一つの説話と見てよい。さて、これに類似した説話は、『荘子』の他の篇にも見られる。いまここでは、達生篇の説話をあげておきたい。

「仲尼適楚、出於林中、見痀僂者承蜩、猶掇之也。

仲尼曰、『子巧乎。有道邪』

曰、『我有道也。五六月累丸二而不墜、則失者錙銖。累三而不墜、則失者十一。累五而不墜、猶掇之也。吾処身也、若厥株拘。吾執臂也、若槁木之枝。雖天地之大、万物之多、而唯蜩翼之知。吾不反不側、不以万物易蜩之翼。何為而不得』

孔子顧謂弟子曰、『用志不分、乃凝於神、其痀僂丈人之謂乎』」

養生主篇の説話の方は、文恵君が料理人の庖丁から牛を解体する技術の話を聞いて、そこから生を養う方法を知ったというものである。また達生篇の説話は、孔子が蜩（せみ）とりの者の技術の話を聞いて、精神を集中する方法を得たというものである。この二つの説話は、文恵君・孔子といった身分の高い者が、庖丁・蜩とりという身分の卑しい者の技術から人生の知恵を得たということで共通するが、さらに会話の進め方も似ている。まず状況を的確に記述したあとで、文恵君・孔子が、彼らの技術の秘訣をたずねるのに対し、庖丁・痀僂者が自己の技術を得るに至った段階を説明し、最後に文恵君・孔子が、生を養う・精神を集中する方法を得て感歎するという、ほとんど同じ形式を踏んでいる。『荘子』の説話の中には、説話の形式では始まっているが、会話中の一人の発言が長く続いたりして説話としての面白さに欠けるものもあるが、この二つの説話の場合は要領よくまとめてあり、説話としても充分に成功しているといえる。

達生篇には他にも、孔子と游ぎの名人の丈夫との問答、魯侯と木細工師の梓慶との問答など、これと似かよった形式の説話もあるが、ここではいま一つ天道篇の桓公と輪扁の登場する説話を挙げておきたい。

「桓公読書於堂上。輪扁斲輪於堂下、釈椎鑿而上、問桓公曰、『敢問、公之所読、為者何言邪』

公曰、『聖人之言也』

曰、『聖人在乎』

公曰、『已死矣』

曰、『然則君之所読者、古人之糟魄已夫』

桓公曰、『寡人読書、輪人安得議乎。有説則可、無説則死』

輪扁曰、『臣也以臣之事観之。斲輪、徐則甘而不固、疾則苦而不入、不徐不疾、得之於手而応於心。口不能言、有数存焉於其間。臣不能以喩臣之子、臣之子亦不能受之於臣。是以行年七十而老斲輪。古之人与其不可伝也死矣。然則君之所読者、古人之糟魄已夫』」

この説話は、桓公が堂上で本を読んでいると、堂下の車輪作りの扁が上がってきて、桓公の読んでいるものは古人の糟魄（かす）にすぎないとし、桓公の詰問に対し、輪扁が自分の仕事の技術をひきあいにだして、見事に弁明するというものである。この説話は、会話の応酬の回数が多く、最後が輪扁のやや長い発言で終わっている点など、前の二つの説話と形が多少は異なるけれども、同じ形式の説話と見てよいであろう。

さて、ここで養生主篇の説話のみでなく他の篇の説話にも及んだのは、これら三つを含む説話は一つのまとまった群と見ることもできるのではないかと考えるからである。説話としての質を評価することは難しいことであるが、この三つの説話について見る限りでは、あるものが他のものより特に優れているとか劣っているとかはないようである。これらの説話の内容（思想）と形式について見てみると、思想が一致しているかどうかはともかくとして類似してい

ることは確かであり、形式については酷似している。さて、一個人が思想なり見解を文字の上で表現する場合、異なった作品であっても表現形式・文体の上で、その個人が持っている特徴が現れるものであり、時と場合によって表現なり文体を自在に駆使することは、やや考え難いことである。そのような意味において「解牛」説話は、養生主篇の他の部分よりは、以上あげた一連の説話群の方にむしろ近いといえる。ある一個人がこれら一連の説話を創作したとはいえないけれども、一つの共通した考えをもつグループがあり、同じ時代に同じ気運の中で創作された可能性はある。少なくともこう考える方が、別個に創作されたとか、あるいは時代を隔てて創作されたと考えるよりは自然である。

(三)

(三)と次の(四)は、あるいは連続した一つの説話と見る見方もあるが、ここでは先に述べた理由により分けて考察してみたい。

「公文軒見右師而驚曰、『是何人也。悪乎介也。天与、其人与』曰、『天也。非人也。天之生是使独也。人之貌有与也。以是知其天也、非人也』」

公文軒が右師を見て驚いて言った。「どうしてそんな姿になったのか。どうして片足を切られたのか。それは天の定めか、人の過ちか」と。右師は、「それは天であって、人ではない。天が私を生むに当って、一本足になるように運命づけたのである。人の姿・形は、与えられたものである。だから私がこうなったのも天であって人の過ちではないのである」と答えた、以上がこの部分の大体の意味である。

さて、この説話のように刑罰によって片足になった者を登場させている話は、他の篇にも見える。内篇の徳充符篇は、特にこの種の説話が多い。その中より比較的短く、これと類似した説話を挙げておきたい。

「魯有兀者叔山無趾。踵見仲尼。

仲尼曰、『子不謹、前既犯患若是矣。雖今来、何及矣』

無趾曰、『吾唯不知務而軽用吾身。吾是以亡足。今吾来也、猶有尊足者存。吾是以務全之也。夫天無不覆、地無不載。吾以夫子為天地。安知夫子之猶若是也』

孔子曰、『丘則陋矣。夫子胡不入乎。請講以所聞』

無趾出。孔子曰、『弟子勉之。夫無趾兀者也。猶務学以復補前行之悪。而況全徳之人乎』

無趾語老聃曰、『孔丘之於至人、其未邪。彼何賓賓以学子為。彼且蘄以諔詭幻怪之名聞。不知至人之以是為己桎梏邪』

老聃曰、『胡不直使彼以死生為一条、以可不可為一貫者。解其桎梏、其可乎』

無趾曰、『天刑之、安可解』」

ここにも刑罰を受けて足を切られた者が登場する。彼、叔山無趾は、孔子に教えを請おうとするが、孔子は彼を追い帰す。無趾は、孔子のそのような態度に対して、孔子は思っていたほどの人物ではなかったという意味の批判を加える。孔子は態度を改め無趾を受け入れようとするが、無趾は孔子のもとを去っていく。その後、無趾は老子のもとに行き、孔子の至らない様子を説明し、最後に老子の言葉に対えて孔子を非難して、「天が孔子に刑を与えてそんな風にさせたのだから、とても人の力ではそれを解いてやることはできない」と述べるのである。

これは、徳充符篇の第三番目の説話に当るが、第一の説話においては兀者王駘、第二の説話においても兀者の申徒嘉を登場させ、それぞれ兀者に対して高い評価を与えているという類似性を持っている。なお第四の説話として形の醜い哀駘它を登場させ、孔子に「是必才全而徳不形者也」と絶賛させている。また第五の説話においても闉跂支離無脤という醜男を登場させ、桓公に道を説いている。なお第五の説話のあとに説話に継続する形でやや短い論説的な文が続き、さらにこの後に荘子と恵子の問答を載せてこの篇を終わるのではあるが、徳充符篇全体としては、兀者をし

て道を語らせたり、醜男を徳の至った人物として評価するという形式の説話を集めた感がある。

さて、養生主篇に戻ってこの説話に注目すると、養生主篇のこの一つの説話の背後には多くの同じような説話が存在していることがわかる。さらに言えば、これらの多くの説話の中からこの説話が養生主篇のこの部分に最も適当であるということで採用されたと見ることもできる（これは(2)の説話についても言えることである）。この説話が極端に短いこと（たとえ(4)に当る部分を含めたとしても）を考えると、この説話が本来ある説話の一部分であり、場合によってはある程度修正されてここに採られた可能性もあるといえる。

(四)

この後に続く部分は、極めて短いものである。

「沢雉十歩一啄、百歩一飲。不蘄畜乎樊中。神雖王不善也」

さて、この部分を前に続けて考えるかどうかであるが、(三)の説話について振り返ってみると、公文軒の質問が、「…天与、其人与」であるのに対し、右師の答えが「以是知天也。非人也」で終わっていて、質問と答えが対応しており、(三)を独立したものと見ることもできる。もちろん(三)と(四)を続けて解釈することもできるが、(四)自体も独立した一つの世界を構成しているのも事実である。

さて、(四)についてその意味を見てみると、「沢の雉は、十歩行っては餌をとり、百歩行っては水を飲む。かごに入れられて飼われることを求めない。神は満たされていても、自分で善しとは思わないからである」となろう。さて、(三)と(四)が、それぞれ独立していると同時に、続けても解釈することができるという事実は、この二つの部分が本来別の所にあったものであり、編輯する際に一つのものとして結びつけられた可能性もあることを示している。

(五)

さて、第五は老子の死を扱った説話である。

「老聃死。秦失弔之、三号而出。
弟子曰、『非夫子之友邪』
曰、『然』
『然則弔焉若此、可乎』
曰、『然。始也吾以為其人也、而今非也。向吾入而弔焉、有老者哭之、如哭其子、少者哭之、如哭其母。彼其所以会之、必有不蘄言而言、不蘄哭而哭者。是遁天倍情、忘其所受。古者謂之遁天之刑。適来夫子時也、適去夫子順也。安時而処順、哀楽不能入也、古者謂是帝之県解』」

老聃が死ぬと、秦失が弔問に行った。彼は三たび声をあげて泣いただけで出てきた。弟子が、「あなたの友達ではありませんか」と問うと、秦失は、「私は始めは老聃を立派な人だと思っていたが、今はそうではない。なぜなら、今多くの人が柩の傍で泣いているが、これは生前老聃が人々にそのように仕向けておいたからである。人の生死というのは時の流れであり、自然にまかせておけば哀楽の入る余地がない」と答えた。

以上が大体の要約であるが、この説話は『史記』にも見えていない老子の死を扱っているということで注目されるが、もう一つ注目すべき点として老子を否定的にとらえているという点がある。ただし天道篇の士成綺と老子の説話では、老子の家の鼠の穴に食物が散らばっていたり、食べきれない食物が積まれてあるのを非難している所はあるが、最後は士成綺は老子に敬服している。そのような意味では、養生主篇のこの説話は『荘子』の中でもやや特殊なものであるといえる。

(六)

さて、第六の部分も非常に短いものである。

「指窮於為薪、火伝也、不知其尽也」

この部分は難解であり、古来様々の解釈があるが、「薪を火に入れると燃え尽きてしまうけれども、火そのものは伝わっていくものであり尽きることがない」という主旨であろう。さて、この部分は短く名家の命題を連想させるが、(四)の短文にも近い性質があり、短く独立した論説的な文、という範疇でとらえるならば、(一)にも近い性質を持っているといえる。なお、(六)の部分は(五)の延長として考える注釈も多い。これもちょうど(三)と(四)の関係に似ており、(五)を独立したものと見ることも可能であると同時に、(五)と(六)を一連のものと解釈できなくもない。これも、どちらの解釈が正しいかというより、このような形をしていること自体を問題として考える必要がある。

二

以上見て来たように養生主篇は、

(一)短文（二つに分けることも可能）
(二)説話
(三)説話
(四)短文
(五)説話
(六)短文

より構成されている。さて、この六つの部分はそれぞれ独立したものとしてとらえることも充分に可能である。しか

も、㈡と㈢の説話については、それぞれ類似の説話が多いことから、これらの説話が単独に存在するのではなく、これらの説話の背後には多くの説話（群）が存在することがしられる。また㈤の説話にしても、老聃の死を扱ったという点では珍しくはあるが、人の死を弔う場面を扱い、弔い方の意外な仕方をめぐって問答をかわし、生と死、あるいは死者の生前の人となりについて議論を進めるという範疇でとらえるならば、至楽篇の荘子の妻の死に臨んで荘子が盆を鼓して歌っていたという説話を入れることも可能であるし、大宗師篇にある子桑戸の死をめぐっての説話などもこれに類している。その他病気の者を見舞う場面、死をめぐっての説話というふうに考えるならば、『荘子』の中にこれに類したものは多く見られる。

一方、短文[注2]についてであるが、㈠の部分についていえば、先に述べたように斉物論篇の最初の説話の後半にある論説部分と言葉の上でも近似している所もあり、それらをまとめて一つのグループと見ることも可能である。ただ斉物論篇の方は、抽象的で深遠な哲理を含んでいると想像される部分が多いのに対し、養生主篇のこの部分の方は、やや具体的であるし、韻を踏んでいるのも斉物論篇の方に全く見えないわけではないが、やや異質である。

次に㈣についてであるが、ここでは先ほどと異なった視点から見てみたい。ここには「沢雉」が登場し、「十歩行っては餌を食べ、百歩行っては水を飲む」とあり、（小）動物に対して恐らく実際の観察を通してと思われる細かい描写であるが、このような例は『荘子』の中に多く見られる。内篇の中よりその幾つかをあげておきたい。

(1)「(蜩与学鳩笑之曰) 我決起而飛、槍榆枋、時則不至而控於地而已矣」

(2)「朝菌不知晦朔、蟪蛄不知春秋」

(3)「(斥鴳笑之曰) ……我騰躍而上、不過数仞而下、翺翔蓬蒿之間」

(4)「(許由曰) ……鷦鷯巣於深林、不過一枝。偃鼠飲河、不過満腹」

(5)「(荘子曰) 子独不見狸狌乎。卑身而伏、以候敖者。東西跳梁、不避高下。中於機辟、死於罔罟。今夫斄牛、其

大若垂天之雲。此能為大矣、而不能執鼠」（以上逍遙遊篇）

(6)「（《王倪》曰）……民湿寝、則腰疾偏死、鰌然乎哉。木処、則惴慄恂懼、猨猴然乎哉。三者孰知正処。民食芻豢、麋鹿食薦、蝍且甘帯、鴟鴉耆鼠。四者孰知正味。猨猵狙以為雌、麋与鹿交、鰌与魚游。毛嬙・麗姫、人之所美也。魚見之深入、鳥見之高飛、麋鹿見之決驟。四者熟知天下之正色哉」（斉物論篇）

(7)「（蘧伯玉曰）……汝不知夫螳蜋乎。怒其臂以当車轍。不知其不勝任也。……夫愛馬者、以筐盛矢、以蜃盛溺。適有蚤虻僕緣、而拊之不時、則欠銜、毀首、碎胸」（人間世篇）

(8)「（仲尼曰）丘也嘗使於楚矣。適見豘子食於其死母者。少焉眴若、皆弃之而走。不見己焉爾、不得類焉爾」（徳充符篇）

(9)「泉涸、魚相与処於陸、相呴以湿、相濡以沫、不如相忘於江湖」（大宗師篇）

(10)「（接与曰）……且鳥高飛以避矰弋之害、鼷鼠深穴乎神丘之下、以避熏鑿之患」（応帝王篇）

などがある。以上は内篇より目についたものをやや広く挙げたのであるが、この種の表現が逍遙遊篇に特に多いのが注目される。逍遙遊篇の中では、これらの句は説話とか論説の中に織り込まれていて、独立した句とはなっていない。このように見ると養生主篇のこの部分は、逍遙遊篇の持っている雰囲気に似かよっている所がある一方で、断片的であるという点では異なっている。なお人間世以下の四篇には、(7)～(10)のように動物を登場させた所がないわけではないが、全体の割合いからすれば、逍遙遊篇の場合とは大きな開きがある。

さて、ここで（小）動物の描写について言及したのは、このような細かい観察をし、それを的確に表現するには、ある種の特殊な才能を必要とすると考えるからである。逍遙遊篇に特にこのような描写が集まっていることは、内篇の著述なり編纂を考える上で一つの材料にはなるであろう。

次に(六)の部分についてであるが、これも一つのまとまった概念を有してはいるが断片的である。この部分は、何か

を問いかけ、その問いに深い意味をもたせており具体的な意味はとらえにくくなってはいるが、その一方で簡潔な表現であることも確かである。これに似た形式のものを『荘子』の中より強いて求めれば、天下篇の名家の言が思いつく。これは恵施の「歴物之意」十条とその後の名家の命題の二十一箇条に分かれるが、養生主篇のこの部分は二十一箇条の例えば、

「指不至、至不絶」

「一尺之捶、日取其半、万世不竭」

にやや似かよっている点もあるようである。

なお、名家言と思われるものは、特に斉物論篇に多く見られる。例えば、

「未成乎心而有是非、是今日適越而昔至也」

「以指喩指之非指、不若以非指喩指之非指也。以馬喩馬之非馬、不若以非馬喩馬之非馬也。天地一指也、万物一馬也」

「天下莫大於秋豪之末、而大山為小。莫寿乎殤子、而彭祖為夭。天地与我竝生、而万物与我為一」

などがある。また斉物論篇には「堅白」という言葉もあり、名家と何らかの関係のあることは明らかである。なお斉物論篇のこれらの部分は名家言が一連の論説の中に組み込まれているが、この部分は本来短い断片（語録）の形式のものであった可能性もある。(注3)

三

次に考察を要するのは、養生主篇と内篇の他の篇との関係である。まず養生主篇の特徴の第一として、それを内篇の中においた場合、極めて短いということである。果たして養生主篇を他の篇と同列に扱うことができるのか、ある

いは短いということに何らかの意味があるのかという問題がある。単に一篇が短いといっても、①それが一つの完成されたものであるのか、②本来まとまっていたものの一部分であるのか、③単なる断片、あるいは無関係なものの集合であるのか、によってその意味は大きく異なってくる。

さて、この篇の構成を見た場合、単なる断片や無関係の資料の集合ではなく、処々に気が配られており、かなり洗練されたものを感じさせ、全体としても一応のまとまりをもっている。例えば、㈠においては簡潔で核心をついた表現によって一篇の問題を提起していると見ることもできる。次に㈡・㈢・㈤と、それぞれに形は異なっているが簡潔で印象深い説話を挙げ、㈠の提起を具体的に例示しているかのようでもある。最後には「薪は尽きても火そのものは尽きることがない」という意味の短文をのせ、あたかも肉体の有限と精神の不滅を暗示しているかのようである。もし最後の句にこのような意味が含まれているとするならば、養生主篇冒頭の「吾生也有涯、而知也無涯」とも対応しており、この篇全体を一つの完結したものと見ることも充分に可能である。しかも、「養生主」という篇名も、この篇全体の主張を象徴したものと見れば、内容と離れているわけではない。以上のことよりすると、この篇を一つのまとまりとして見ることは可能であり、またそれぞれの部分もある程度の質の高さを持った素材から成っているということがいえる。

しかし、この篇を読んで物足りなさを感じることも確かである。これはこの篇が極端に短く一篇としての盛りあがりに欠けること、篇名の「養生主」からあるいは具体的な「養生」の術についての記述を期待させるものの、内容はむしろ抽象的であって肉体的な「不老長寿」より精神的な面を説いており期待されたものと異なるという面もあるかもしれない。さらに逍遙遊篇・斉物論篇の質の高さに比べれば、やや劣る所があるという点もあろう。

ここで、養生主篇を逍遙遊・斉物論二篇との比較で簡単に見てみると、養生主篇の㈠において斉物論篇に似た表現のあること、㈣のような小動物に対する細かい観察の記述は逍遙遊篇にも多いこと、㈥の記述は名家言のようでもあ

り、斉物論篇にも名家言が多くあり共通する点も多い。さらに、それぞれ断片のようではあるものの、それを組み合わせることによってある雰囲気を持った一つのまとまりに仕上げている点においては、逍遙遊篇についても同様の見方ができないことはないし、既に触れたように斉物論篇の天籟説話に続く論説にもそれに似ている部分があるなど共通する所がある。

では、養生主篇を人間世以下四篇との比較で見た場合はどうであろうか。これは、逍遙遊・斉物論篇との場合より、かなりの隔たりがあるようである。人間世・徳充符・大宗師・応帝王の四篇を一つのまとまりと考えるかどうかには考察の余地はあるが、これらの篇が主に幾つかの説話を集めているという点では共通性がある。しかも、人間世篇には孔子（仲尼）の登場する説話が三つあり、「無用の大木」をめぐっての同系統の説話が連続している。さらに徳充符篇には、刑罰によって片足になった「兀者」を登場させた説話が三つ連続しており、その後には哀駘它と闉跂支離無脤という醜男をそれぞれ主人公とした説話を二つ載せている。また大宗師篇の中ほどには、子祀・子輿・子犁・子来の四人が親交を結ぶ話と、子桑戸・孟子反・子琴張の三人が親交を結ぶという同系統の話がやはり連続しており、この篇の最後にはさらに子輿と子桑を主人公にする類似の説話がある。このように見ると、人間世以下の篇では、同系統の説話を集めそれを一篇とした感がないでもない。

これは例えば、逍遙遊篇などと比べてみれば、その違いが明らかである。逍遙遊篇にも例えば、

「北冥有魚、其名為鯤。鯤之大、不知其幾千里也。化而為鳥、其名為鵬。……」

と冒頭にあり、さらに

「湯之問棘也是已。窮髪之北有冥海者、天池也。有魚焉、其広数千里、未有知其修者、其名為鯤。有鳥焉、其名為鵬。……」

という部分が、しばらくして出てくる。この二つは明らかに同系列の話からとったものであるが、二つの説話を単に

羅列したのではなくて、巧みに論説の中に組み込ませ重複されていることによって効果を挙げている。

また「無用の大木」をめぐっての説話が人間世篇に連続しているということは前にも述べたが、この系統の説話が山木篇にもあり、一つの説話群を構成しているともいえる。この説話に類する記述は逍遙遊篇にもある。

「恵子謂荘子曰、『吾有大樹、人謂之樗。其大本擁腫而不中繩墨、其小枝卷曲而不中規矩。立之塗、匠者不顧。今子之言、大而無用。衆所同去也』

荘子曰、『……今子有大樹、患其無用。何不樹之於無何有之鄉、広莫之野、彷徨乎無為其側、逍遙乎寝臥其下。不夭斤斧、物無害者。無所可用、安所困苦哉』」

逍遙遊篇の場合は、恵子と荘子の問答の中にこの説話が織り込まれており、人間世・山木篇の説話に比べれば凝縮された感がある。逍遙遊篇のこの部分が最初に成立して人間世・山木篇の説話がそれを普遍させて創作されたという論理も成り立つと同時に、最初にこれら一連の説話群があり、逍遙遊篇を編輯する際にこれらの説話が編輯者の念頭にあって、恵子と荘子の問答の中に巧みに組み込んでいったと考えることもできる。逍遙遊篇冒頭の部分、あるいは「無用の大木」についての記述を通して見ると、逍遙遊篇がかなり巧みに編輯された編纂物である可能性もあるわけで、仮説としてならばこの立場よりの考察も許されよう。

さて、養生主篇に戻って考えてみると、既にも述べたように、篇の冒頭と最後が対応しているとも考えられること、それぞれの説話について類似した説話群があること。そしてその説話群の中より最もこの場にふさわしいものを抜き出したか、あるいはこの場にふさわしいものに改変したということも、これも可能性として考えられること。以上のことを総合すれば、この篇は編輯の方針・態度という面よりすれば、人間世以下の篇よりは、その前の逍遙遊・斉物論の二篇に近い性格のものであると考えることができる。

四

養生主篇は一つのまとまりを持つと同時に、先に六つに分けたように、一つ一つの部分が独立していると考えることもできる。これはどのような意味を持つのであろうか。津田左右吉は、

「さて、かう考えて来ると、『荘子』は啻にそれを一篇づゝに切り離して取扱ふべきものであるのみならず、更にそれを分解して、まとまった思想を説き一つ〳〵の物語を述べてゐる短い一節づゝのものとして考察しなければならぬことも、おのづから知られたであろう」(注4)

と述べるが、これを批判した松本雅明氏の発言には注目すべき点が含まれる。

「最後に津田博士の方法論は、『荘子』を短い一節づつに分解し再構成することによって、原意を見失ひ、かへつて異つた思想を附託するおそれがないであらうか。少くとも『荘子』の一章もしくは一説話は、連関をもつて書かれてゐると思はれるから」(注5)

ここでは津田説には触れないとしても、松本氏の発言を注意してみると反対の立場からの論理も成り立つことがわかる。例えば、養生主篇について見てみると、これが一人の手により成り、相互に関連を持った一つのまとまりであることが明らかであるならば松本氏の議論は確かに成り立つ。しかし、もとの材料があって何らかの編輯なり改変が加えられた可能性があるとすれば、あるいは錯簡があるとか篇の末尾に関連のある説話が付け加わった可能性があるとすれば、逆に「『荘子』の一章もしくは一説話は、連関をもつて書かれてゐる」ということを前提に『荘子』を考察するとするならば、「原意を見失ひ、かへつて異なつた思想を附託するおそれ」が出てくるのである。例えば、「A→B→C……」という連続した一節ずつの文があるとして、「B」の意味を考える場合、「B」を本来違った資料であるかもしれない「A」や「C」、あるいは全体と関連づけて考えると、かえって「B」以外のものが「B」に入り込み、「B」ではない思想によって「B」を解釈することにもなりかねない危険性がある。もし、「A」・「B」・「C」

が一連のものであっても、それを個別に考察して、それを結びつけることは可能である。しかし、「A」・「B」・「C」を始めより一連のものと解釈し、それを分解することには無理が生じる。さらに具体的に言えば、例えば養生主篇に「天」の用例が、㈡・㈢・㈤（㈡は「天理」という語として）に出てくるが、可能性として異なった資料であることもあると考えられる限りにおいては、それぞれ個々に考察すべきであり、その後で個々の考察をつき合わせて「天」の概念に共通するものがあるかを考えるべきである。逆に始めより一連のものと前提して考察したあと、次に部分に分けて考察すると、既にそこに異なった思想が附託している可能性があることを言うのである。このように見れば、養生主篇をはじめとして特に『荘子』の内篇を一節ずつの細かいものに分解して考察し、逆にそれをつなぎ合わせることによって全体を見るというのも一つの方法であるといえる。

さて、最後に養生主篇の性格及び内篇の中に占める意義をまとめておきたい。養生主篇は編輯の態度という立場からすれば、逍遙遊・斉物論篇と基本的には類似している。しかし、全体の雰囲気からすれば前二篇とは微妙に違う所があるようである。逍遙遊篇の自由を求める開放的な雰囲気、斉物論篇の精緻な思弁による格調の高い雰囲気に対し、養生主篇の方は、敢えて言えば後向きの暗い雰囲気を持っているようにもとれる。例えば㈠で、「生には涯りがあるが、知には涯りがない」と述べておきながら、記述が「知」の無限性へと発展するのではなく、「涯りある生で涯りない知を求めることは、あぶないことである」という記述になり、㈠の後半では現実的な「保身」ということになってしまう。また㈥においても㈠と対応し、「肉体」の有限に対し「精神」の不滅を説いているようにもとれるが、これについての具体的説明もなく、読む者に不安を与え、生への「あきらめ」を意図しているともとれなくはない。また㈢においても、右師が片足になったのも「天」であると述べ、それをあきらめているというふうにもとれる。また㈢で「介」者を扱い㈤で老聃の「死」を扱っていることなども、この篇が明るさに欠ける一つの原因にもなっている。このような意味で、私にはこの篇にある意味の「いきづまり」があるように感じるのである。

さて、『荘子』内篇の成立となると大きな問題であるが、ここでは結論のかわりとして現在の時点における考えを示しておきたい。内篇七篇は篇名が内容を要約した、あるいは内容を象徴した三字からなり、篇名のつけ方にも類似した点が見られる。また七篇全体を見た場合でも、人間世篇以下に同類の説話を羅列したと思われる所があるものの、大宗師篇の冒頭には洗練された論説調の記述もあり、応帝王篇末尾には「渾沌」を主人公にした説話があり、内篇全体を一つのまとまりとして見た場合でも最後を飾るにふさわしい非常に効果的な説話であるといえる。既に『荘子』内篇が古典として価値が確立していること自体にも示されるように、内篇は全体として成功していることは認められる。

では、養生主までの三篇と人間世以下の四篇との間の断層についてはどのように考えたらよいであろうか。既に他の所でも触れたことがあるが、(注6)司馬遷の時代において『荘子』は、ある程度は整理されてはいたかもしれないが、基本的には説話・論文・短文などが、それぞれ大体のまとまりをもって並んでいた文献の集成であり、それがその後『荘子』内篇として再編輯されたと想像している。さて、その際に原本『荘子』の質の高い部分を中心に選んで構成していったのが、逍遙遊・斉物論・養生主篇であったと考える。例えば、これらの篇では、論説・説話・短文などで巧みに構成されており、それらを一節ずつ切り離しても独立した一つのまとまりがあるというのもこのことを示しているといえる。また、この三篇にある説話や部分と類似した説話や部分が他の篇にも多く見られるものの、質の点からいえば前三篇のものの方が高く洗練されている場合が多いというのも、このことを示していると考えることができる。

さて、一つの仮説として、逍遙遊・斉物論篇はこのような立場から編輯されていったけれども、養生主篇になるとある程度の材料も出つくされてしまったこともあり、何らかの「挫折」・「いきづまり」があったのではないかと想像してみたい。養生主篇が極端に短く、そこに前二篇と異なる暗さがあり、未完成の感がないわけではなく、結果として質の点でも前二篇に劣るのもこのことによろう。一方人間世篇以下は、同類の説話が集められているという点で

原本『荘子』に近く、恐らく原本『荘子』のある部分をもとに、前三篇とは異なり素材をほとんどそのまま用い、一篇のまとまりなどを考えて多少手を加え比較的短い時間で編輯されたものと考える。外篇・雑篇は原本『荘子』の形をとどめており、人間世以下の四篇が外・雑篇よりは全体としてやや質の高いものより構成されていることは、このことを示していると考えてよい。しかし、結果としては養生主篇を境として編輯態度が異なることによって、かえって前三篇の緊張と後四篇の説話中心の構成との間のバランスがとれ、『荘子』内篇を成功へと導いた面もあるようである。

以上、『荘子』養生主篇をもとに多岐の事柄に及んだが、いずれにせよ養生主篇は『荘子』内篇の成立を考える上で一つの重要な意味があることは間違いないであろう。それと同時に言えることは、同じ『荘子』の同じ篇の中にあっても、説話・論説・短文などと表現形式が異なれば、そこに述べられている思想や主張を同一の基準で処理することは問題であるということである。『荘子』を独立した一つ一つの節に分け、それぞれを考察した上で全体に還元していくという方法も成り立つと考える。このように『荘子』を「文体」・「構成」という点から考えるに当っても、養生主篇は示唆を与える様々のものを包含しているように思うのである。

注

(1) 別稿、「語録としての原本『荘子』」(『九州中国学会報　第二十四巻』一九八三年)で、斉物論篇のこの部分は、本来『老子』と同じような語録ではないかという見解を述べたことがあるが、養生主篇のこの部分も形の上では語録と解せないこともない。

(2) ここで、短文という言葉を使ったのは、(四)・(六)においては断片である可能性もあり、語録・論説という言葉を使った場合に意味が限定されこの部分の本来の性格との間にずれが生じるおそれがあると考えたからである。ここでいう短文とは、単に説話に対する短い文ということで広い意味に用いている。

(3) 前掲論文「語録としての原本『荘子』」参照。

（4）『道家の思想とその開展』（一九二七年「東洋文庫論叢第八」）P48
（5）『中国古代における自然思想の展開』（一九七三年、松本雅明博士還暦記念出版会編）P61
（6）「司馬遷の見た『荘子』」（『九州大学中国哲学論集　第十号』一九八四年）